

## 2014年（第74回）FIP国際会議・薬剤師会議報告

九州大学病院薬剤部  
増田 智先 Satohiro MASUDA

国際薬学連合（International Pharmaceutical Federation: 以下、FIP）の第74回FIP国際会議・薬剤師会議が2014年8月31日～9月4日にタイのバンコクで開催された。

今回、私は日本病院薬剤師会の助成を受け、免疫抑制薬の個別化投与設計に関する研究成果の発表と、本学会に参加する機会を得たので報告する。



（会場） 左：著者、右：九州大学病院池末氏

FIPについて：

FIPは、国際薬剤師・薬学連合（International Pharmaceutical Federation（英））の略号で、1912年に設立されハーグ（オランダ）を本部とする国際的な組織である。世界各国の薬剤師、薬学者から構成され、世界保健機構（WHO）と公的連携を築いている。FIPには132の国、地域が参加しており、世界中約300万人の薬剤師、薬学者をカバーしている。中枢部の理事会は学術部門（Board of Pharmaceutical Sciences, BPS）と職能部門（Board of Pharmaceutical Practices, BPP）に分けられ、病院薬剤師が所属する病院薬剤部門 Hospital Pharmacy Section (HPS) はBPPのセクションの一つである。BPPにはほかに Academic Pharmacy、Community Pharmacy、Industrial Pharmacy、Pharmacokinetics/Pharmacodynamics & Systems Pharmacology（以下、PK/PD & SP）など8つのセクションも所属している。

日本からは日本薬剤師会、日本病院薬剤師会、日本薬学会、日本薬剤学会が団体として加盟している。毎年学術会議を主催しており、2014年はタイ・バンコク市で開催された。（FIPホームページを参考に要約、<https://www.fip.org>）

薬剤師・薬学会議：

今回は” Access to Medicines and Pharmacists Today, Better Outcomes Tomorrow” を主題とし、様々な項目を関連領域横断的に取り上げた6つのトピックをメインとした73のシンポジウムやワークショップが企画された。

## 表1 メイントピックス

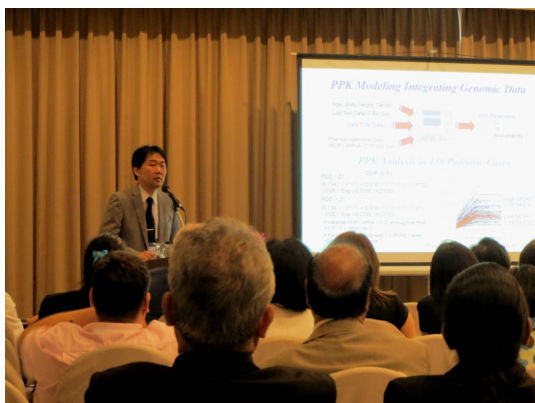
1. Access to medicines
2. Access to pharmacists and pharmacy services
3. Access to information
4. Realising better outcomes tomorrow
5. Education, education and education!
6. Special interest symposia

世界共通の重要なテーマである薬剤師の役割、医薬品の開発と供給、医薬品情報、薬学教育、個別化医療などについて、現状と将来像に関する多くの発表がなされた。上述の様に、様々な専門領域からの参加者がいるため、複数のセッション（シンポジウムやワークショップ）が同時進行されていた。

### シンポジウム：

病院薬剤師が所属する HPS は多くのセッションに関わっていたが、私が参加したシンポジウム” Personalized medicine: Pharmacokinetics and pharmacodynamics at the point-of-care” も、HPS の副会長である武田泰生氏（鹿児島大学医学部・歯学部附属病院 教授・薬剤部長）と PK/PD & SP の Dr. Donald Mager（ニューヨーク州立大学バッファロー校 准教授、International Society of Pharmacometrics (ISoP) 会長）が司会をされた。本シンポジウムでは、薬物の投与設計個別化を支援する PK/PD 理論に焦点をあて、4 名の演者がそれぞれ割り当てられたトピックについて、その概念や生理学的モデル解析、遺伝子多型などに関してそれぞれ幾つかの実例を取り上げながら教育的な側面も交えつつ講演した。多くの聴衆が集まったために、途中から会場内の椅子を増やすほどの盛況であった。私は Population-based methods to guide dosage adjustments という話題での講演を依頼され、京都大学勤務時代に行ってきた

肝臓移植患者における免疫抑制薬タクロリムスの個別化投与設計を念頭ににした研究成果について” Molecular markers-based dosage adjustment of tacrolimus in liver transplant patients” というタイトルで講演し、日本 TDM 学会と日本移植学会との共同で完成した「TDM 標準化ガイドライン：免疫抑制薬～臓器移植編～」についても紹介した。



(シンポジウムで講演中の著者)

講演後に複数の国の薬学関係者から質問を受け、有意義な内容だったと言われた。患者個々の特性に応じた投与設計が広く浸透することを期待するとともに、今後も日本の果たすべき役割は大きいと考えられた。

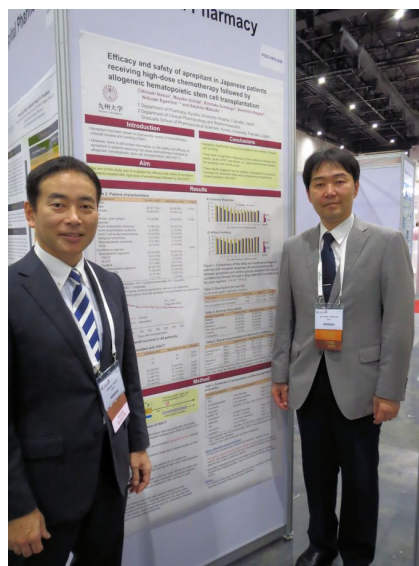
別のシンポジウムでは、シンガポールの外来クリニックで糖尿病患者の薬物治療管理において、事前に作成されたプロトコルに基づき薬剤師が様々な薬物療法の管理を行っていることが報告された。他にもこのクリニックでは、アメリカのクリニックにおけるclinical pharmacistの業務に近いと考えられるが、例えば糖尿病で血糖値管理が難しい患者に対して、患者の生活リズムや理解度に応じてインスリン製剤の変更を提案し、良好な血糖コントロールが得られた例などが紹介された。日本でプロトコルに基づく薬物治療管理（PBPM）を推進していくうえでも興味深かった。

#### バーゼル・ステートメント：

医薬品の供給管理から人材育成までの全ての領域をカバーし、病院薬剤師業務の世界標準化に向けたバーゼル・ステートメントが2008年のスイス・バーゼル大会において採択された。今回のバンコク大会では、バーゼル・ステートメントを受けて、その後各国の状況がどの様に変化したか、さらに改訂に向けた活発な議論が展開された。

#### ポスター発表：

登録演題数は506を数え、なかで最もエントリーが多かったのはCommunity Pharmacy セクションの146演題、HPSではそれに次ぐ99演題であった。先に述べたバーゼル・ステートメントに対するその国での現状と改善策について検討した報告もみられた。発表者は他の学会と同様、指定された時間帯にポスターの前に立ち、参加者からの質問に対応する。HPSのExecutive Committeeメンバーを中心に優秀ポスター賞の選考が行われ、今年の最優秀ポスター賞は、パキスタンのNadia Ayoub氏が発表された「Developing competency through webinar to establish oncology pharmacy services at the aga khan hospital, dar-es-salaam, tanzania」であった。Aga Khan 大学病院（パキスタン）では、薬剤師だけでなくテクニシャンをはじめその他の医療従事者を対象としたがん医療における教育プログラムを構築し、Dar-us-Salam病院（タンザニア）にwebセミナー等を通してプログラムを提供し、他国の医療従事者の教育に役立ったという素晴らしい取り組みの紹介であった。



また、優秀ポスター賞は2演題選ばれ、そのうちの一つは九州大学病院の池末裕明氏が発表した「Efficacy and safety of aprepitant in Japanese patients receiving high-dose chemotherapy followed by allogeneic hematopoietic stem cell transplantation」が受賞した。これは、造血幹細胞移植の前処置として高用量の抗がん薬を連日投与する化学療法において、薬剤師・医師の協同によって提案・合意したレジメンごとの制吐療法の有効性と安全性を評価したものである。幸いにも日本からの情報発信が高く評価されたことを嬉しく思うと同時に、今後の国際的な病院薬剤師業務の進化・充実と標準化に向けて日本への期待が大きいことが伺える。

おわりに：

今回、日本からの参加は事前登録として55名で、タイの政治情勢も影響してか近年では比較的少なかった様に思われる。他国では、アメリカ（117名）、ポルトガル（96名）、デンマーク（88名）、タイ（70名）、オーストラリア（68名）、ナイジェリア（66名）が多かった。2015年はドイツのデュッセルドルフ市、2016年はアルゼンチンのブエノスアイレス市で開催される予定である。本学会を通じて世界の状況を知ることや情報交換できるだけでなく、旧知の外国人薬学者と互いに現況を話し合い、友好を深め、新たな友人を作ることが出来るなど、「薬学・薬剤師」というキーワードに集まる様々な背景や考えを持った人たちと交流を持つことは個人的な見聞を広める上でも非常に有用と思われる。今後、FIPを含む国際学会に日本からさらに多くの病院薬剤師が、出来れば各自の成果をもって参加・発表し、日本の存在・レベルを世界に示し海外との交流を深める良い機会として活用することを期待している。

謝辞：

最後になりましたが、今回貴重な機会を与えて下さった日本病院薬剤師会北田光一会長、国際交流委員会折井孝男委員長、FIPのHPS部門武田泰雄副会長をはじめ関係各位に厚く御礼申し上げます。